

竹下政孝著

『イスラームを知る 四つの扉』

ふねうま舎 二〇一三・一刊

四六 三一〇頁 二八〇〇円

本書は、そのあとがきにもあるように、著者が『中東協力センターニュース』に一九九八年から二〇一一年まで寄稿した文章を再編集したものである。扱われているテーマは実にさまざまで、著者がイスラーム理解の際に重要だとみなす思想やキーワードを、クルアーンをはじめとする豊富な文献引用とともに解説する。

次に本書の構成を紹介しよう。本書は序と、「第一の扉」から「第四の扉」までの、大きく五つの部分から成る。序「イスラームと現代」では、まず前半部分において、イスラームという宗教がどのように特徴づけられるかが、その歴史について振り返りながら議論される。後半部分では、伊東俊太郎の提唱した「精神革命」に、イスラームを位置付けることが試みられる。「精神革命」は前八世紀から前四世紀にかけて、ギリシア、インド、中国、イスラエルで起こったとされる、より合理的・普遍的な世界観への精神的変革を指すが、それに遅れて現れたキリスト教とイスラームは「第二次精神革命」「二神教革命」と位置付けられる。

第一の扉「生と死の思想」では、イスラームにおける死後の世界観について考察されている。クルアーンやハディースに散在する来世や天国、地獄に関する記述が数多く紹介されているが、各

情報が伝える内容は一様ではなく、互いに類似と相違を含んだものとなっている。様々な時代、立場にいたムスリムたちが、彼らなりの解釈や理解に基づいて各々来世を想像していたことがうかがえる。

第二の扉「魔術・科学・習俗―イスラームという意識」では、イスラームにおける科学や自然、宗教的慣行への理解のあり方を考察する。本章の前半では、クルアーンやハディースの記述から、魔術や科学（特に医学）がイスラームの中でどのように理解されてきたかが論じられる。後半では、聖遺物や暦、ヴェールが統治や人々の日々の暮らしにおいてどのような役割を果たしていたかが考察される。

第三の扉「預言者・追隨者・天使―イスラームの根」では、預言者と奇跡との関係、イスラーム思想の萌芽期の人物としてのハサン・アルバスリー、イスラームにおける天命と自由意志の関係、神と人間の中間の存在としての天使・悪魔・妖鬼などが論じられる。「イスラームの根」と著者が記しているように、この扉ではイスラームの根幹とも言える六信の内の天使、使徒、神の予定に関する議論が扱われている。

第四の扉「聖者・聖女・スーフイズム―イスラームの心」はイスラーム思想史における禁欲主義や神秘主義を主に扱う。中でも、スーフイズムに哲学的思弁を取り入れたイブン・アラビーや、聖女とされるラービア・アダウイーヤ、ペルシア語で作品を著した聖者ルーミーに焦点が当てられる。

以上紹介したように、本書の扱うテーマは非常に多種多様であ

る。そして、これらのテーマはいずれも、現在に至るまでのイスラーム思想史上、繰り返し、盛んに議論されてきたものであると言える。また、それ故に、これらのテーマはいずれも、ムスリムがムスリムたる上でのアイデンティティーの形成や、彼らの精神世界の構築に多大な影響を与えてきたものでもある。そうした問題について様々な角度から知識と理解を深めることができる本書は、まさに「イスラームを知る」ための大きな手がかりとなる一冊であるだろう。

(水上 遼)